

韓国における日本語教育の現状と問題点

——日韓コミュニケーション・ギャップからの考察——

中 村 均

はじめに

韓国は、世界で最も活発に日本語教育がすすめられている国である。日本と韓国との間は、その地理的な近さも、さることながら、政治、経済、国防上の問題から文化の面に至るまで密接な関係にあり、また日本語と韓国語が文法的に類似点の多いことなども手伝って、韓国における日本語熱は年々、高まっている。ところが、過去の痛ましい歴史の残照が、いまなお色濃く投影しており、これがひいては日韓のコミュニケーション・ギャップにもなり、多くの問題点を引き起こしている。

この小論では、韓国日語日文学会がまとめた最新版の「日本語教育と研究の実態調査」(一九八五年度)の資料を中心に、日韓コミュニケーション・ギャップの面から考察したい。ここという韓国とは、一九四八年八月

十五日、独立した大韓民国をいい、それ以前の朝鮮半島における国名は、そのまま使用し、また地域の一般的な呼称については、朝鮮としたこと、このため、朝鮮語という言葉も出てくることを、おことわりしておきたい。

一、日本語教育の歴史

1 李朝時代の日本語教育

韓国における日本語教育の現状を述べる前に、いつごろから、この地で日本語教育が行われ、さらに、その後の歴史はどうであつたか、概観してみよう。

公的な記録に現われる最初は、一四一四年、李王朝の太祖十四年十月二十六日、「司訳院ニ命ジテ倭（日本）語ヲ習ハシム」と『太宗実録』^{〔1〕}に出てくることである。司訳院とは、高麗時代に外国語の翻訳と通訳業務を担当していた通文館の後身で、高麗末期に司訳院と改称し、これが李朝になつても、そのまま引き継がれ、当初は中国語、つづいて蒙古語が加わっていたものだが、十三世紀からはじまって、当時も、猛威を振っていた和寇への宥和策として、その来住貿易を許したことから、日本語の練達者が必要となり、司訳院で日本語教育をはじめたわけである。記録によると、一四一〇年（太祖十年）には、慶尚道に二千人の日本人が住んでいたという^{〔2〕}。その後、司訳院の担当する外国語には女真語（満州語、のち清語）が加わり、結局、四外国語となつている。語学生の定員は、中国語三十五名、蒙古語十名、日本語十五名、のち同二十五名、女真語二十名であつた。日本語の学生は、中央の司訳院のほか、当時の貿易港である釜山に十名、熊川の齊浦に十名、蔚山の鹽浦に六名いたが、のち齊浦と鹽浦は廃止され、かわつて済州島十五名と巨濟島五名が追加された^{〔3〕}。

日本語の教師としては、司訳院に倭学訓導十名がいて教育に当たったが、このほか倭学廳、倭学聴敏廳という二つの語学堂で教育がなされ、教師陣は倭学廳が教誨十名、倭学聴敏廳が同十五名であった。また後年（一六八二年）になると、やはりソウルに倭学偶語廳が置かれ、日本語学生二十名を収容している。⁽⁴⁾

日本語を勉強する学生のためのテキストには、一六七六年（肅宗二年）に刊行された『捷解新語』（刊行の年には諸説があつて、一六二七年との説もある）がある。これは秀吉の「壬辰の乱」（日本という文禄慶長の後）で捕虜になり、日本に十年間、滞在したのち帰国した慶尚南道・晋州生まれの康遇聖（滯日中、関が原の戦いに徳川家康の部隊に属して従軍もした）が著述したもので、通訳と貿易を担当する「別差」（訳科）の採用試験にも用いられ、その後、一七四七年と一七八一年に、それぞれ改定版が出されている。また日本語の辞書として、十八世紀初頭、『倭語類解』が刊行され、一七九六年には『捷解新語文釈』が出ている。⁽⁵⁾

日本語の練達者が通訳と貿易の面で、大きな勢力を持っていたことは、一八〇三年（純宗三年）に起きた、次の朝鮮人蔘をめぐる汚職事件でもわかる。

すなわち

「倭館館守（釜山にあった倭館の日本人館守）、東萊府使（朝鮮側）徐有鍊二一書ヲ出示ス。書中ニ曰ク、貴国ノ人蔘十年前後、皆ナ假蔘ヲ以テ割付造作シ、品劣リ効無シ、還退甚ダ多ク、歛縮七十斤二近シ。並ニ上品ヲ以テ即速入送セヨト。有鍊、簿ヲ見ルニ、流来ノ歛縮六十九斤六兩アリ。首訛、金健瑞、勾管ノ蔘貨ハ、果シテ何様ノ蔘料ヲ以テ入給セシカラ知ラズ。是日命ジテ健瑞ヲ倭館門外ニ於テ回示嚴梃後、遠地ニ減死定配セシメ、負逋訳官ヲ東萊府獄ニ嚴囚セシメ、歛縮ノ蔘ヲ館守ニ入給セシム。而シテ此後、若シ此等、猥越ノ罪ヲ踵グ者

アラバ、館門ニ梟首スルノ事ヲ定式ト為ス」（純宗実録卷五）⁶

とあるが、死一等を免ぜられて遠島流罪となった首訳の金健瑞は、『捷解新語文釈』の編者でもある。

釜山の倭館は、一四〇七年（太宗七年）に開設されていた、途中、二度にわたって閉鎖されたことがあるが、一八七六年（高宗十三年）の江華島条約で廃止されるまで、四百六十余年にわたり、朝鮮における対日外交と交易の中心地であった。

（二）開化期の日本語教育

一八六七年、日本が明治維新によって王制復古をなしとげ、西欧化の道をひた走ったのに対し、李朝末期の朝鮮は、大院君時代に徹底した排外政策をとり、次の閔氏一族の時代になって一転、開化策をとったが、朝鮮をめぐる国際情勢はすでに厳しく、一八七六年には日韓修好条約、すなわち江華島条約が締結され、日本および欧米列強の前に「屈服」した。一八八四年、金玉均らの急進的開化主義者によるクーデタ、甲申政変が起き、日露戦争が勃発した一八九四年には近代化促進のための甲午改革がなされた。この時、李朝建国以来、つづいていた科擧の制や司訳院も、廃止されたが、新たに登場したものとして注目されるのが官立外国語学校である。

すなわち、一八九五年、外国語学校官制が公布され、ソウルに日本語、中国語、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語の各官立外国語学校が設立されたのである。この官立漢城日語学校の前身は、一八九一年に設立された私立の日語学院であったが、校長には、日語学院からひきつづき岡倉由三郎が就任した。教官数（校長を含む）は、日語学校が八名、英語学校が六名、その他が四名であった。学生数は、英語学校が最も多く、一九〇一年には英語学校七十名、日語学校五十七名、法語（フランス語）学校三十七名、一九〇六年には英語学校百二十七名、日語

学校八十八名、漢語（中国語）学校五十四名の順となっている。日語学校はソウル本校のほか、仁川と平壤に分校が置かれた。⁽⁸⁾

十九世紀末から二十世紀初頭にかけては、日本語の普及を目的とした、日本人による私立学校の経営も活発となり、一九〇〇年現在では次のような諸学校があった。⁽⁹⁾

校名	学科	設立者
京城学堂	普通学・日本語	海外教育会
城津学堂	同	東亜同文会
平壤日語学校	同	同
木浦日語学校	同	同会木浦支部
公州学堂	同	海外教育会
釜山開成学校	日本語及実業	個人
韓南学堂	普通学・日本語	同
安城学校	同	同
光州実業学校	実業	東本願寺

このような日本人による日本語教育の目的は、当初、日本語を媒介にして近代的な知識を吸収することであったが、のちにだいに日本語そのものの教育に重点がおかれるようになる。

日露戦争後の一九〇六年、統監府が開設され、いわゆる「統監政治」がはじまると、学制の改正が行われ、四年

制の普通学校（初等教育）と高等普通学校（中等教育）では日本語が必修科目となり、毎週六時間の日本語教育が義務づけられる。この過程の中で、各地に設けられていた日本人の手になる私立の日本語学校は消滅していった。また朝鮮の保護国化にともない、外交権もなくなると、外交官や通訳官の養成という官立外国語学校の存在意義は失われ、一九〇九年には各官立外国語学校のすべてが統合されて、官立漢城外国語学校となり、校長には学部書記官、三土忠造が就任した。これにともない、官立漢城日語学校は、官立漢城外国語学校日語部と衣替えし、仁川と平壤の分校は仁川実業学校、平壤高等学校（のち平壤高等普通学校）となった。⁽¹⁰⁾

（三）日本統治時代の日本語教育

一九一〇年八月から一九四五年八月までの三十六年間にわたる「日本統治」時代は、これまで外国語であった日本語が「国語」となり、民族固有の言語である朝鮮語の教育そのものが、しだいに圧迫されていった期間である。

一九一一年八月、勅令により「朝鮮教育令」が公布、十一月から施行されたが、その第二条に「教育に関する勅語の趣旨に基づき、忠良なる国民を育成することを本義とす」とあった。公立の学校では日本語が教授用語となり、普通学校規則では「国語（日本語）は国民たるの性格を涵養するに必要なものみならず、日常必須の知識技能を授くるに於て欠くべからざるもの」とされ、さらに高等普通学校規則では「国語は国民精神の宿る所にして且知識技能を得せしむるに欠くべからざるもの」となった。⁽¹¹⁾ 私立学校に対しては厳しい規定を加え、私立学校規則で国語と修身を必修とし、さらに朝鮮時代から依然、社会に根を張っていた書堂には、書堂規則を定め、「漸次勸奨して、国語及び算数を教授せしむることを要す」とした。⁽¹²⁾

もちろん、こうした「植民地化」教育に対する朝鮮側の反撥は強く、朝鮮総督府内でも朝鮮民族の日本化＝同化

は到底、不可能とし、同化による「忠良化」よりは、「順良化」にとどまるべきだ、と主張する者もあった。たとえば、「併合」前には倭孫一の下で韓国政府学部書記官となり、また三上忠造のあと外国語学校長をつとめ、「併合」後には朝鮮総督府書記官および学務課長をつとめた隈本繁吉である。

隈本は、「教科意見書」¹³の中で

「第一、朝鮮民族ハ同化(ジャパニゼーション)ニ必要ナル特殊ノ要素ヲ欠ク。朝鮮民族ヲシテ日本民族ニ同化セシメント欲セバ、単ニ其言語・風俗・習慣等、外的模倣ニ止ラズシテ、日本民族ノ特徴タル忠義心ヲ体得セシムルコトヲ要ス。此忠義心タルヤ既ニ述ベタルガ如ク、我皇室ハ吾等ノ大宗家タル事実ニ淵源スルモノニシテ、説明訓諭等を待チテ後始メテ啓発セラルルモノニアラザルナリ。朝鮮民族ハ我皇室ニ対シテカゝル特殊ノ関係ナキヲ以テ、彼等ヲシテ此美妙ナル忠義心ヲ体得セシムルコトハ全ク不可能ナルベシ。

第二、朝鮮民族ハ不完全ナガラモ三千年来国家ヲ成セル民族ナリ。彼等ハ古来完全ナル独立国家ヲ成セシコトナク、殆ド常ニ大国ニ付属ノ位置ニ立チタリト雖、彼等ノ宗主国ハ所謂不治ヲ以テ治之ノ政策ヲ採リ、単ニ其正朔ヲ奉ゼシメ或ハ、定期ニ朝貢セシムルニ過ギザリシヲ以テ、朝鮮民族ハ相当ノ自尊心ヲ以テ其制度文物ヲ発展セシメ、以テ彼等ノ民族精神ヲ醸成シ得タリシナリ。

教育ノ効果ヲシテ最モ顕著ナラシメントメニハ、教育者ト被教育者トノ智徳ノ懸隔ノナルベク大ナランコトヲ要シ、且被教育者ノ十分ナル陶冶性ヲ有スルコトヲ要ス。同化ノ効果ヲ収メンニモ亦殆ド同様ノ事情ヲ要スルモノナリ。然ルニ、朝鮮民族ハ、タトヘ遅々タリシトハ云ヘ三千年来ノ発達ヲナセシモノニシテ、其言語・風俗・習慣ハ確立セラレ且其民族精神ハ既ニ形成セラレ居ルヲ以テ、日本民族ヨリノ感化影響ヲ受ケテ之ト同

化セントスル陶冶性ハ頗ル乏シト云フベク、又朝鮮民族ノ文化モ相当ニ發展シ居レバ、日本民族ガ与フル感化影響ヨリ過大効果ヘノ生ジ得ベキコトヲ期待シ難カルベシ。

第三、彼等ハ朝鮮民族ナリトノ明確ナル自覺心ヲ有ス。彼等ノ排日的演説ニ或ハ排日的歌詞ニ表ルル所ニ徴スルニ、「三千里ノ江山」「二千万ノ同胞」ナル語ハ殆ド彼等ノ常套語トナリ居レルガ如シ。此民族的自覺心ハ、日本民族ノ同化的感化ニ最モ大ナル障害トナルモノナリ。

第四、朝鮮民族ハ千二百万以上ノ大衆ナリ。日本民族ノ同化力ノ強キコトハ既ニ述ベタルガ如シト雖、ソハ大數ノ日本民族中に投シ来レル極少數ノ日本民族ニ過ギザレバ、其ガ及ス感化影響ヲ移植シ得タリトスルモ尚十ノ一二足ラズ。日本民族ニシテ確乎タル民族的自覺心ヲ有スルニアラザレバ却リテ朝鮮民族ニ化セラルルノ惧ナシトセザルナリ。

以上ハ諸多ノ障害中ニツキテ其主ナルモノヲ挙ゲシニ止レドモ、是等ハ皆、英仏諸國ガ植民地民族ニ對シテ曾テ遭遇セザリシ全く別種ニシテ然カモ有力ナル妨碍トナルモノタルコトヲ觀ルベシ。是ニ由リテ、朝鮮民族ヲシテ日本民族ニ真ニ同化（ジャパナイズ）セシムルコトノ至難事タルコト明ナルベシ。」

「コレ余ノ朝鮮民族ハ忠良化スルコトハ難キモ順良化ハ期シ得ベク、此方面ニツキテノ教化作業ハ決シテ徒勞ニ終ラザルベシト信ズル所以ナリ。サレバ、余ハ朝鮮民族教化ノ興趣ヲ「順良化」ニ求メンコトヲ希望スルモノナリ。」

この限本の考え方には、支配者としての思想が貫かれているとしても、朝鮮民族の自覺心こそは「忠良化」の壁になるものであると看破したあたり、注目に値する。しかし、朝鮮総督、寺内正毅は、「順良化」を退けて、同化

Ⅱ「忠良化」の方向を採択したのである。

朝鮮総督府の「武断政治」に対する朝鮮民衆の憤激が爆発したのは、一九一九年の、いわゆる三・一運動⁽¹⁴⁾である。総督府は、これを機に「文化政治」を標榜して、一九二二年、朝鮮教育令を改正し、「一視同仁」政策の一方、漸進主義をとることになった。

この改正教育令では、朝鮮語教育そのものは普通学校（当初、修業年限四年、のちに六年、ただし、土地状況により五年または四年とすることができ）、高等普通学校（当初、修業年限四年、のち五年）、女子高等普通学校（当初、修業年限三年、のち五年または四年）で授けるものとし、また当時の日本人子弟を教育する小学校、中学校、高等女学校においても、土地の状況により付設科目として、朝鮮語の科目を設けることができた。その後、一九三四年、普通学校を補うための簡易学校（修業年限二年）の制度が生まれ、修身、国語（日本語）、朝鮮語、算術、農業が教科目となったが、ここでは農業の実習に力が用いられた。⁽¹⁵⁾

中国大陸の情勢が陰悪になり、一九三七年七月、蘆溝橋事件が起きると、戦火は中国全土に広がり、翌三八年には国家総動員法が成立して、戦争への動員体制がつくられ、朝鮮では朝鮮教育令が全面的に改正された。これを機に「内鮮一体」の「皇民化運動」が一層推進される。この新教育令で、学校制度はすべて日本内地と同一となったが、朝鮮語は小学校、中学校、高等女学校の教科科目の正科からはずされて、随意科目となった。つづいて一九四一年の朝鮮教育令改正で、小学校は国民学校と改称され、正規の教科目以外に朝鮮語を設けることができるとしたが、朝鮮語をどのように教育するか、の教授内容の規定は失くなった。朝鮮語の科目をおくかどうかは、地方の状況を判断して学校長が決定すべきものとされ、すべての学校が一律に朝鮮語を廃止したのではなかった。⁽¹⁶⁾

けれども、当時の異常な雰囲気の中では、総督府の「国語奨励」策に反抗して、ことさら朝鮮語を学校教育の中にとり入れることは困難なことであったろう。

しかし、日本統治期を通じて、朝鮮における日本語普及率が二〇％に達していないのは、興味ある数字といえる。⁽¹⁷⁾

(四) 第二次大戦終了後の日本語教育

一九四五年八月十五日、朝鮮は三十六年間にわたる日本の植民地支配から解放され、やがて三十八度線を境に北と南に分断される国家が成立した。南ではアメリカの軍政が三年間、布かれるが、この時代の教育は、日本色の払拭からアメリカ教育思想の採用への転換が大きな流れだった。日本語の徹底的な排撃とハングルの使用促進がなされるが、このことは李承晩を大統領とする大韓民国が成立した一九四八年八月十五日以降も継承される。ここでは反共とともに反日が国是となった。

「空白」の十六年のうち、韓国における日本語教育は、李承晩政府が四・一九学生革命⁽¹⁸⁾によって倒れた翌一九六一年、ソウルの韓国外国語大に日本語科が設置されたのはじまる。ついで一九六二年には同じくソウルにある夜間大学の国際大に日語日文学科が設置されるが、当時は五・一六軍事革命の成功とともに「近代化」が国家建設のスローガンとして打ち出され、経済建設が急激にクローズアップされた時期である。

一九六五年には、日韓正常化が行われ、このころになると、大手商社、銀行はじめ日本の企業が次々と、韓国に進出し、また多くの日本人観光客がこの地を訪れるようになる。このような状況に、ソウルや釜山などに私設の日本語講習所（一般に日語学院という）が続々と生まれ、一九七一年には六十余、七二年には二百以上にも達す

るが、大部分は劣悪な教育環境だった。¹⁹⁾

そして、ついに日本語教育のうえで画期的な時代が訪れる。「解放」後、二十八年を経た一九七二年七月五日、朴正熙大統領は、日本語を高等学校の第二外国語の選択科目に追加するよう指示したのである。これまでは第一外国語が英語、第二外国語がドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語のうち、どれかひとつ選択となっていたが、大統領指示の翌一九七三年二月十四日、文教部令第三二〇号で日本語が正式に外国語科目として認められた。同年二月一日には韓国日本学会も誕生している。

この措置は、民族文化の自主独立的な精神を堅持しながら、外国語を積極的に受入れるという教育多元化の線にのっとったものであることは、次の朴大統領談話²⁰⁾(一九七二年七月五日)の内容からもうかがえる。

①日本は韓国といういろいろな面で類似しており、参考とすべき点が多いが、特に農業その他の技術関係書類を利用するために、日本語を解する者が多くなければならない。

②過去の日韓関係の故に、日本語を忌避する傾向があるが、精神さえしっかりしていれば、日本語を学んだからといって、日本人になるものではない。したがって、民族の主体性および闊達な大国民の度量が必要である。

また文教部の日本語教育課程の指導目標には、次のように記された。²¹⁾

- ①現代日本語の発音と基本語法を学ばせ、日常的な文章を理解する能力と簡単な発表力を育てる。
- ②日本語を通じて、わが国固有の伝統と文化を紹介し、正しく意志伝達ができる基礎能力を育てる。
- ③日本の文化・経済などの理解を増進させ、国際的協力心を養うとともに、われわれ自身に対する自覚を強固

にする。

このうち②の「わが国固有の伝統・文化を紹介し」とか、③の「われわれ自身に対する自覚を強固にする」といった規定は、他の外国語の教育目的には見出されない。これは、日本語に対する韓国人のアレルギ―を、それだけ考慮してのことであろうが、このへんの半ば苦衷に満ちた心情は、一九七三年の韓国日本学会の次のような設立趣旨⁽²⁾でもうかがわれる。

「日本からの受難を直接体験した我らにとって一切の日本的なものへの否定的姿勢を持ち続けてきたことはいたしかたない。しかし歴史は変遷し、感情的拒否だけが未来を解決するものではない。(中略)国際社会の緊密化現象にともなう他国の影響は即刻かつ深刻であり、一衣帯水の日本の諸問題はそのまま韓国の諸問題につながる。(中略)大陸で発祥し、韓半島で濾過された文化を日本は土着化させ、それを日本的に再形成させた。東洋文化圏の一環の中でも日本文化は特有性を持ち、その文化との比較を通じて韓国文化の再発見を試みる。(中略)我らは感情的不信を止揚し、知性の照明によって日本をありのまま研究する。」

いずれにしても、大統領の指示を機に、日本語学習者は年々、大変な勢いで増えていったことは、厳然たる事実である。

二、日本語教育の現状

(一) 大学

大統領の指示にもとづく日本語学習の新しいうねりは、大学をも洗わずにはおかない。韓国各地の大学で、日本語関係学科が次々と設置され、一九八五年現在、次のとおり、四十二校、四十六学科に達した。(分校は一枚に数える)

日本語関係学科の設置された大学一覧(◎国立総合大学、○私立総合大学、▽私立単科大学、韓国語日本語学会編『日本語教育と研究の実態調査—一九八五年度』その他から作成)

設置年	校数	大学名
一九六一年	一	○韓国外国語大(日本語科)
一九六二年	一	▽国際大(日本語日文学科)
.....		
一九七二年	一	○世宗大(日本語日文学科)
一九七三年	六	○慶南大(日本語教育学科) ◎慶尚大(同) ○啓明大(日本語日文学科) ▽関東大(同)
一九七四年	五	○誠信女子大(同) ○清州大(同) ○建国大(外国語教育学科) ▽関東大(観光経営学科) ▽釜山女子大(日本語教育学科) ▽祥明女子大(同) ○圓光大(同)

一九七五年		○全州大（日語教育学科）▽（一九八六年から）○韓南大（日語日文学科）
一九七六年	二	
一九七七年	二	○啓明大（日本学科）○濟州大（日語日文学科）
一九七八年	一	○東亜大（日語日文学科）
一九七九年	四	○東国大慶州校（日語日文学科）○釜山産業大（同）▽祥明女子大（同）○全南大（日語教育学科）
一九八〇年	一〇	○京畿大（日語日文学科）○檀国大（同）▽同徳女子大（同）○釜山大（同）○嶺南大（同）
一九八一年	九	○仁荷大（同）▽全州又石大（同）○朝鮮大（同）○中央大（同）○漢陽大（同）
		○慶熙大（日語日文学科）○大邱大（同）▽徳成女子大（同）○東国大ソウル校（同）○東義大（同）○蔚山大（同）○全南大（同）▽仁川大（同）○韓国外国語大龍仁校（日本語科）
一九八二年	一	▽釜山外国語大（日本語科）
一九八三年	一	○高麗大（日語日文学科）
一九八四年		
一九八五年	二	○慶北大（日語日文学科）○燒星女子大（同）

これを地域別にみると、次のようになる。

ソウル特別市一三、釜山直轄市六、仁川直轄市二、大邱直轄市五、京畿道四、江原道二、忠清
南道一、全羅北道二、全羅南道三、慶尚北道三、慶尚南道三、済州道一

学科別では

外国語教育学科一、日語教育学科七、日本語科三、日語日文学科三三、日本学科一、観光経営学科一となる。
また専門課程以外に、教養課程として、日本語を教えている大学（専門課程設置大学をのぞく）が、次のよう
に十五校に上っている。

地域	校数	大学名（△国・公立大学 □は国立ながら一般大学ではない）
ソウル特別市	一	◎ソウル大語学研究所
京畿道	二	□警察大▽聖心女子大
江原道	二	△江陵大◎江原大
忠清南道	五	○高麗大鳥致院校△公州師範大▽大田大▽培材大◎忠南大
全羅北道	二	△群山大▽全州教育大
全羅南道	三	△順天大▽湖南大▽湖西大

さらに日本の短期大学に相当する専門大学では次の二十三校に日本語科が設置されている。（○私立専門大）

地域	校数	専門大学名
ソウル特別市	二	○崇義女子専門大○弘益工業専門大
釜山直轄市	六	○慶南工業専門大○東元工業専門大○東洲女子専門大○釜山経商専門大○釜山女子専門大○聖心外国語専門大
仁川直轄市	二	○仁川専門大○仁荷工業専門大
京畿道	一	○長安実業専門大
江原道	一	○東宇専門大
忠清南道	三	○大田実業専門大○忠南経商専門大○淸田専門大
全羅北道	三	○群山水産大○群山実業専門大○紀全女子専門大
全羅南道	二	○東新実業専門大○瑞江専門大
慶尚北道	二	○慶州経商専門大○慶州実業専門大
慶尚南道	一	○経営水産専門大

日本語専攻学生の四年間にわたる学習内容は、だいたい一年で基礎日本語、二年で中級日本語と会話、文法、作文、日本事情、三、四年で時事日本語、古典、詩歌、近代小説講読となる。参考までに、京畿大日語日文学科の教科運営表を紹介しよう。

韓国における日本語教育の現状と問題点

京畿大日語日文学科教科運営表

		科 目 名	專 攻 (選擇別)	受 講 學生數	使 用 教 材				
					教 材 名	著 者 名	出 版 者 名		
一 年	1	日 語	教養必須	51名	大學日本語	日語教材編纂會	京畿大學出版部		
		基礎日本語Ⅰ	科別基礎	58	〃	權 萬 赫	高麗出版社		
	2	日 語	教養必須	47	〃	日語教材編纂會	京畿大學出版部		
		基礎日本語Ⅱ	科別基礎	51	〃	權 萬 赫	高麗出版社		
二 年	1	視聽覺日本語	〃		日本語の基礎	海外技術者 研修調査會			
		日語講讀Ⅰ	專攻必須	39	大學中級日本語	金 永 佑	學文社		
		日常用 漢字	專攻選擇	38	大學日本語	權 萬 赫	高麗出版社		
		日本語 實習	專攻選擇	38	日本語作文	崔 丁 龍	學文社		
		日本語講讀Ⅱ	專攻必須		大學日本語	孫 大 俊	法文社		
	2	日本語實習	〃 選擇		大學日本語	權 萬 赫	高麗出版社		
		日語會話Ⅰ	〃		日本語會話	孫 大 俊	同和文化社		
		日短篇講讀	〃	39	てのひらの小説	川端康成	旺文文庫		
		日本事情	〃	32	日本文化論	孫 大 俊	法文社		
		日口語文法	〃 必須	34	初歩の國文法	村上本二郎	昇龍堂		
		三	日本語作文練習	〃 選擇	30	日本語作文	崔 丁 龍	學文社	
			時事日語	〃	26	毎日新聞 讀賣新聞其他雜誌			
三 年	1	日戲曲論	〃	25	日戲曲論	木下順二	岩波新書		
		日語學 概論	〃	31	日本語	金田一春彦	岩波書店		
		日文學史	專攻必須	33	簡明日本文學史	稻賀敬二(外)	第一學習社		
		日隨筆	專攻選擇	32	黄金の言葉	亀井勝一郎	大和書房		
		日語會話Ⅱ	〃		現代日本語會話	全 基 定	普成文化社		
	2	日語指導法	〃	30	(高校)日本語	權 萬 赫	東亞文化社		
		日文語文法	〃	31	對照日本文法	遠藤嘉基	中央圖書		
		日語發達史	專攻必須	28	日本語を遡る	大 野 晋	岩波新書		
		四 年	1	日古典散文講讀	專攻選擇	11	日古典講讀	大石初太郎	清水書院
				日近代詩講讀	〃	25	近代詩	境 忠 一	桜楓社
日本文學練習	〃			17	古事記	武田祐吉	角川文庫		
日文學特講	〃			27	日本文學論集	朝長のり	南榮文化社		
日語學練習	〃			27	日本漢字教本	金 永 佑	學 文 社		
2	日古典詩歌文學特講		〃	10	小倉百人一首	三木辛信	京都書房		
	日作家論		〃	27	釋迢空	岡野弘彦	桜楓社		
	日近代小説講讀		〃	26	草 枕	夏目漱石	新潮文庫		
		教 養 日 本 語		660	大學日本語	京畿大出版部	日語教材編纂會		

教養課程の学習内容は、教養日本語が中心になり、また専門大ではもっぱら実用的な日本語の習得をめざして会話、通訳訓練、作文、日本事情などの授業に重点がおかれる。

教材は、初期のころには長沼直兄著『標準日本語読本』に範をとった朴成媛編著『標準日本語教本』が最も多く使用されていたが、最近では専門課程の教材としては、各大学の日本語担当教師が個人あるいは連名で編集出版した教本を使う例が年々、顕著になっている。中級以上になると、日本で出版された中級教科書、あるいは日本の高校教科書を採用するところも多い。また古事記、古今和歌集、竹取物語、徒然草、小倉百人一首などの古典から夏目漱石、森鷗外、樋口一葉、芥川龍之介、永井荷風、有馬生馬、志賀直哉、川端康成、三島由紀夫、辻邦生、大岡昇平、さらには三浦綾子、黒柳徹子などの現代作品まである。

日本事情の教科書はプリント物が多いが、中根千枝『タテ社会の人間関係』、ベネディクト『菊と刀』を使っているところが数校ある。

学生数は、大学の専門課程が九〇四五名、教養課程が二万七八〇七名、専門大が四七五五名、合計四万二六〇七人である。

教養課程は、一週間に三時間ていど、第二外国語の選択科目として学ぶものだが、どの大学も、日本語の受講者であふれ、たとえば、東国大では毎年、四千人から五千人、朝鮮大では三千五百人から四千人、檀国大、嶺南大では三千五百人ていどの受講者がある。慶南大、大邱大、忠南大、全南大、東亜大なども二千五百人以上である。こうした大学の中には、全学生の九〇%までが日本語を選択するという異常ともいえるべきブームが起きている。(韓国日語日文学会編『日本語教育と研究の実態調査』からは、これだけの数は出てこない)

教員についてみると、専門課程で常勤が一八八名、非常勤が九九名、教養課程で常勤九名、非常勤二〇名、専門大で常勤が三五名、非常勤四〇名、不明二、となっている。

専門課程に常勤が多く、教養課程と専門大に非常勤の割合が高いのは、教育の内容からいって当然の成行きであろう。

教員の最終学歴で、日本の大学もしくは大学院卒（旧制専門学校を含む）と、韓国の大学、もしくは大学院卒の割合は、次のようになる。

	日本の大学・大学院卒	韓国の大学・大学院卒	その他・不明
専門課程	一一一	一五七	一九
教養課程	六	一九	四
専門大	一二	五五	一〇

大学の専門課程に、日本の大学、もしくは大学院卒が比較的に多いが、これには招聘の日本人教師や韓国人と結婚した日本人女性が教師になって教壇に立っている者も含まれている。

大学院に日語日文学科が設置されたのは、一九七三年、韓国外国語大が最初だが、一九八五年現在、日本の修士に当たる碩士課程が置かれているところが八校、博士課程が置かれているところが一校となっている。

(二) 高校

韓国の高校は人文系と実業系に分れ、さらに人文系は人文社会系と自然科学系に分れているが、日本語を第二外国語の選択科目にしている高校は、韓国日語日文学会編『日本語教育と研究の実態調査』によると、一九八五年

現在、次のように三六〇校に達し、全国高校の一八%を占めている。

地域	人文系	実業系	計
ソウル特別市	二〇	二一	四一
釜山直轄市	三	一七	二〇
仁川直轄市	四	五	九
大邱直轄市	四	二	六
京畿道	七〇	一七	八七
江原道	一八	二	二〇
忠清北道	一二	二	一四
忠清南道	一二	六	一八
全羅北道	三六	二二	五八
全羅南道	二〇	一五	三五
慶州北道	一〇	八	一八
慶州南道	一四	一二	二六
済州道	三	五	八
合計	二二六	一三四	三六〇

五年前の一九八一年で、人文系一五〇、実業系一二二、合計二七二校だったから、八八校、三二%の増である。地域的には京畿道をはじめとして各道での増加が大きい。一方、ソウルや釜山、仁川、大邱など大都市では、その高校数に比較して少ない。本来、五つある外国語の中から何を選択するかについては、学生の自由にまかされているが、実際には学校側が統一して設置する場合が多く、学生の希望者が多数を占める外国語、あるいは、その学校における日本語教師の確保状況などを勘案して決定されている。一般に理工系大学進学を希望する生徒の多い男子高校でドイツ語、文化系希望の多い女子校でフランス語を選択する傾向が強いといわれるが、何より学校長の判断が優先するようである。大都市ほど、日本語選択に対する校長判断が厳しいともいえよう。教科内容は、一九八二年一月十八日の改訂高等学校指導課程によると、次のようになっている。

I. 目標

日本語の使用能力を養い、日本の文化を理解させて、韓国の文化の発展に寄与するようにする。

1. 日常生活と一般的な話題に関する易しい言葉について、聞く、話す、読む、書く能力を養う。
2. 日本人の生活および文化に対して幅広く理解する。

II. 内容

1. 言語機能

- (1) 聞く能力と話す能力

① 発音を練習する

- ② 易しい言葉の内容を聞いて理解する

③ あいさつ等、簡単な対話をする

④ 知っている素材に対して練習する

(2) 読む能力

① 文章を声を出して読む

② かな文字と教育漢字の音読と訓読を識別して読む

③ 文章の大意を把握する

(3) 書く能力

① かな文字と教育漢字を覚えて書く

② 簡単な話を聞き取りする

③ 口頭で習った易しい言葉を文章にする

④ 一定の文型および語彙を利用して簡単な文章をつくる

⑤ 簡単な韓国語を日本語に翻訳する

⑥ 生徒の周辺にある様々な話題について文章をつくる

Ⅲ. 言語

1. 素材

① 日本人の生活とわれわれ(韓国人)の日常生活および文化全般に関連する次のものの中から、正しい価値観の形成に役立つものを選ぶ

- 。学校生活に関するもの

- 。日常生活に関するもの

- 。そのほか社会生活の周辺に関するもの

② 文章の形式は会話体、叙述体などで内容を構成する

- 。生徒の興味、必要、知的水準などを考慮して、学習動機を誘発すること

- 。内容が正確で実用的なもの

2. 発音

- 。現代日本語の標準発音にする

3. 語彙

- 。基本的な語彙七五五個を含めて、使用頻度の多い二二〇〇内外の語彙を選んで使用する

4. 文型・文法

- 。文型・文法の事項は使用頻度と活用度を考慮して基本的なものとする

この指導課程にもとづき、日本語は他の選択外国語と同じように、人文系高校（人文社会系、自然科学系とも）で一〇～一二単位、実業系高校で六～一〇単位を三年間で履修することになっている。

教材は、一九八三年までは、韓国日語日文学会・文教部編集の『高等学校新日本語』（上・下）が使われていたが、八四年からは、新しいテキストとして、五種類の『高等学校日本語』の使用が認められるようになり、各高校の判断で、テキストの選択が行われている。これまでの文法・解釈中心から会話へ重点を移すよう試みられている。

視聴覚教育としてのラボは、日本語の場合、ほとんど使われていない。

日本語を学ぶ高校生の数は、一九八五年現在で、三一万五三一一名、これは全高校生の約一五％に当たる。五年前の一九八一年現在が二三万九一八八名、全高校生の約一三％だったから、約七万六千名、二％増加したことになる。

教員の数は、一九八五年現在で四六九名。一九八一年が二九九名だったから、一七〇名も増加したことになる。常勤と非常勤の割合は、常勤四二九名、非常勤二〇名、不明二〇名である。

(三) その他

ソウルの日本大使館、釜山の日本総領事館などでも、日本語講座が開かれ、また大学によっては、夜間の日本語講座を開いているところもある。たとえば、釜山の慶南工業専門大では日本に近い地域の特殊性を考慮して、一般商工人を対象に六か月間の夜間日本語特別講座を開設し、毎年一二〇人ていどが学んでいる。

さらに国際交流基金は、日本語普及に各種の助成を行っている。

三、問題点

韓国における日本語教育の問題点をあげるに当たっては、全体として社会の底流にある基本的な問題と、教育の現場にある個々の具体的な問題に分けて考察する必要がある。

(一) 基本的な問題

これまでみてきたように、韓国での日本語学習者は、大学、高校とも、大変な数で増えているが、これに反撥

する社会の風潮は、いぜん強く、これがひいては日本語そのものを軽視し、日本語を学問言語でないとする態度にさえなっている。それは、まずマスコミ論調に現われている。たとえば「大学入試志願者の減少と日本語への傾斜」と題する一九八五年九月二十六日付『東亜日報』⁽²³⁾の社説がそうである。これによると

「八六学年度大学入試考查志願者が締切られたことで、二つの注目すべき現象が現われた。一つは、過去十五年間、着実に増加してきた志願者数が、小幅ではあるが、初めて減ったこと、もう一つは、初めて実施する第二外国語の選択で、日本語選択の志願者が四一・七％と、甚だしい日本語への傾斜をみせたことである。

二十五日、中央教育評議院の発表によると、昨年より浪人が二五、二一八名減った一方、現役は一二、八七四名増え、一・七％の小幅減少が示されたのである。従って、このように志願者数が減ったのは、ひとえに浪人志願者が減ったためであることが分る。浪人の志願者数が減ったのは、これまで報道されている通り、八六学年度から考查科目に追加された第二外国語と論述考查が負担になったためと分析することができる。さらに最近の経済不況に、労働市場への大卒者の過剰供給が重なり、大学を出ても就職に必ずしも有利でないという判断があるていど作用したと思われる。(中略)こうした現象は、大学定員が必要供給を通じて、自然に調節される一つの可能性をみせたとも解析しうる。

第二外国語の選択で日本語選択者が四一・七％にも達したのは、若干の驚きとともに、色々なことを考えさせる。まず、日本語が現実的に商業的な実用性は持つていても、末だドイツ語、フランス語ほどの学問言語水準には至らないにもかかわらず、これほど多くの受験生が日本語を選んだということは留意すべき事実といわざるをえない。

日本語は、語族の全く異なるドイツ語やフランス語、スペイン語、中国語よりも、習いやすく、あまり苦勞せずに、良い点数を得ることができることが、こうしたことを生んだのであろう。学問的な言語の問題は後回しにして、とりあえず、日本語選択で大学受験に合格しようという考えに起因するものである。また、最近になって日本の国勢が政治、経済、軍事面で拡大していく趨勢であるうえ、韓日間の各種交流が大きく増加したことにより、日本語の実用性が高まっていることにも、原因があるのでないかと思う。しかし、最も大きな社会的理由は、日本語が他の外国語に比べ、習いやすく、周囲の父母や親戚などにも日本語ができる既成世代が多いので、課外（塾通いなど）がなくても、容易に学習できる利点があるためである。

日本をよく知り研究するために、その道具である日本語を習い、選択することは悪いことではない。だが、若者たちが学問言語であるドイツ語やフランス語を避け、日本語だけに大幅に偏するのは、望ましいことではない。圧倒的な日本語への傾斜に歯止めをかけ、ほかの外国語選択との均衡をとる措置が必要であらう。」
となっている。

この社説が、第二点の日本語選択者が大幅に増えたことに言及して、ほかの外国語選択とも均衡させる必要があると主張したのは、うなづけるとしても、ここで問題なのは、日本語はドイツ語やフランス語のような学問言語でないとする、誤解と錯覚にみちた態度であらう。

実は、日本語を「学問上、ふさわしくない」ときめつける、このような考え方は、日本語が大学入試で第二外国語の選択科目として初めて登場した七五年当時から起きている。高校での日本語教育は、一九七三年、約一三〇校（全体の一四％）でスタートし、七五年には約二〇〇校となり、当時の各第二外国語の比率は、ドイツ語四九・

三%、日本語三一・八%、フランス語一七・六%、中国語一・三%で、日本語は量的にも順調に増大していったが、入学時から日本語を学んだ高校生たちが三年生になった時点で、大きな壁にぶつからざるをえなかった。⁽²⁴⁾

すなわち、入試科目に第二外国語を課してきた各大学が、第二外国語に日本語を入れることに冷淡だったのである。とくに、ソウル大が七五年八月四日、次のような理由から、日本語を除外したことは、大きな波紋を呼んだ。

①日本語は学問上、第二外国語として、ふさわしくない。

②日本語に対する抵抗意識が、韓国民の間にまだ根強く残っている。

③ソウル大に、日本語学科あるいは日本語講座がなく、適当な出題者がいない。

七五年の入試科目に日本語を入れたのは、中央大でいどであり、このため、当時、日本語を選択していた全国三万人の高校生は、やむなく志望校を変更したり、日本語を捨てて、他の外国語の勉強をあわてて始めるという大混乱も起きた。この事態に、文教部は「ソウル大などで日本語を第二外国語の選択科目から除外したことは、日本語を学んだ多くの受験生に、選択の機会を与えない結果になるのみならず、文教政策にもとる」として、日本語を試験科目に追加することを促すとともに、大学入学予備考査要綱を一部修正し、予備考査（日本の共通一次試験に相当する。ただし私立大学にも適用）の第二外国語に日本語を追加することを決定した。しかし、この強力な文教部の勧奨にもかかわらず、七六年の本考査（各大学別二次試験）で日本語を受入れたのは、ソウル、釜山、忠南、全南（以上、国立）、中央、誠信女師（以上、私立）の六校だけだった。⁽²⁵⁾

一九七七年の予備考査からは、第一、第二の区別なく、外国語は一科目となり、このため、事実上、英語だけ

の試験となり、高校の現場では第二外国語は自習時間や補習時間にあてられる始末になった。文教部は、事態改善のため、一九七九年から第二外国語を必修科目として、七九年度新入生が大学に進学する八二年から予備審査に英語および第二外国語の受験を義務づけ、さらに八六年からは英語とは別に第二外国語の受験を義務づけるよう変更した。

このように日本語が入試科目に入るかどうかで、高校生たちの勉学の仕方は大いに変ってくるが、問題は、ソウル大が七五年に日本語を除外した際の理由に挙げた①の「日本語は学問上、第二外国語として、ふさわしくない」とした点である。②の「日本語に対する抵抗意識が、韓国民の間にまだ根強く残っている」のは、現在でも、いぜん指摘できることであるが、偏見ともいうべき①の問題がなぜ、出てきたのだろうか。

今日、日本語は世界でも最も権威ある言語（プレス・レーン・ランゲージ²⁶）の一つとして認知され、あらゆる学問の分野が日本語で読めるとされている。また日本語そのものを駆使した文学の領域においても、古典文学（平安女流文学を含んで）から現代文学に至るまで、高い評価を受けていることは、いまさら論をまたないであろう。それにもかかわらず、日本語が学問言語でないとして追放され、軽視されるのには、その背景としてコミュニケーション・ギャップがあるからというほかない。

○ 遠因

もともと、李朝五百年にわたる朝鮮は、その儒教思想から日本を夷狄化する考え方が強い。室町幕府期の日本とは「抗礼」（対等の礼）による交隣であったが、秀吉による「倭乱」があったのち、一時中断されていた交隣関係は復活するものの、江戸幕府とのそれは「警戒しながら交わる」という消極的な関係となった。一方、中国大陸と

の関係では、明に対しては「事大」（以小事大）思想となるが、この「大中華」としての明が滅び、「霸道」によって清が登場すると、「東方礼儀の国」は朝鮮だけとなり、自らが唯一、「小中華」として「尊華攘夷」にいよいよ凝り固まっていたのである。⁽²⁷⁾ 江戸時代の日本との間には、一六〇七年から一八一一年まで十二回の朝鮮通信使が来日し、江戸までいつているが、日本側の使節は室町期と違って、ソウルまでの朝鮮内陸旅行が許されずに、釜山の倭館までとなっている。李朝五百年の支配階級は、文民優位としての儒者たちであるが、その儒者たちの日本観は、「尚武」的侵略性に強い不信感をいだいており、それは儒教的後進性による礼儀の欠除によるものと考えていた。⁽²⁸⁾ 一七一九年（享保四年）に訪日した製述官、申維翰は、その著『海游録』⁽²⁹⁾の付編である『日本聞見雜録』で、次のように述べている。⁽³⁰⁾

「兵制は、もつとも精強である。各州の太守はすべて武職であり、その入るところの田賦は、ことごとく養兵の具をなす。軍兵一人の年間廩料は二十五石であり、その他の徭役はない。また百石以上の将官を置いて、地を割いてこれに与え、力役と収税をかれに任せる。将官は、あるいは元定の（ほんらい所定の）数があるにもかかわらず、虐民すること万端、元定の数を無理して収奪する。将官は、それぞれ賦せられるところの地をもつてその部下を養う。しかして、平民の膏血は日をおうて枯渇し、兵家に入らざればすなわち衣食の出るところがない。ゆえに民は力を竭くしてみずから売り込み、将官の部下になることに思いを寄せる。

既にして兵になることを許されれば、すなわちその身はみずからのものにあらず、死生と飢飽はすべて将官の手中にゆだねられる。ひとたび名を軍籍に騰録すれば、いたる処で他人に劣るような佩剣を見せなくてはならず、それが劣れば人間仲間之列することができない。刀槍の傷瘍が面前にあれば、指して勇夫となし、禄を得る。

それが耳後にあれば、指して善く逃げる者として、斥けられる。けだしその法令の人を駆使すること、かくの如くである。しかして、衣食の原が他にないので、彼らが生を軽んじあえて死する所以は、初めから、主君のために義を慕うにあらず、また天稟の然らしむるところにもあらず、夷に、みずからその身を謀るからである。

こうして軍卒は、平素からの訓練によってそれが習性となり、事に遇えば蛟（みずち）の如くに奔り猪の如くに突つ込み、賊を見れば、燈火に飛びいる蛾の如く、轍（わだち）にぶつつかる蟪（なつぜみ）の如くなる。だから、たとえ將たる者が鈍才であつても兵卒が死力を尽くし、兵卒が脆弱であつても戦いに赴いては勇ましい。これ野蛮の習性とはいえ、しかし養兵の術を得たものというべきであらう。」

この申維翰の、日本武家政治の「尚武」的性格に対する「喝破」を、直ちにコミュニケーション・ギャップとみることはできない。しかし、日本を「夷」「邪」の汚染とみ、自らを「華」「正」の清潔として捉えていった朝鮮儒者たちの思想は、対日観の形成の上では負の方向に働くことになる。もちろん、それまでの和寇や秀吉の「倭乱」による被害の甚大さが、大きく作用しているが、その伝統的価値観としての「衛正斥邪」思想は、次の新しい時代の近代においても、開化思想と対抗しながら、固守される。しかも、古代の日韓関係においては、韓国の方が文化の先進国であるという自負が、これにプラスして、倭夷「日本」という図式が定着していくが、朝鮮儒教の根本思想そのものが近代に入っても完膚なきまでにたたきのめされるという、経験を経ないでいることの影響は大きい。

○ 近因その一

対日論の厳しさの近因は、何といつても、一八七六年二月の江華島条約を転機として、日本による植民地化が

決定的となった一九〇五年十一月の、いわゆる日韓保護条約以降、展開する「統監政治」時代、さらに、その後、三十六年間におよび「日本統治」時代において培われた「支配者」への「被支配者」の反撥であろう。その抵抗の歴史をひもとけば、枚挙にいとまがないが、日韓保護条約の締結に際し、『皇城新聞』³¹の紙上で、社長の張志洵が書いた「是日也放声大哭」と題する社説は、慟哭に満ち、末尾は、次のような文となっている。³²

「我二千万為人奴隸之同胞よ、生か死か。檀箕以来四千年、国民精神が一夜之間に猝然滅亡(亡)止か。痛哉痛哉、同胞よ同胞よ。」

この「是日也放声大哭」は、日本側の警務顧問の検閲なしに書かれたものであり、張志洵は逮捕され、皇城新聞社は一時、閉鎖された。代って鋭い論陣を張ったのがイギリス人ベッセル(裴説、Bethell)の経営する『大韓毎日申報』³³である。

これは、日本人の検閲の手がおよびえない新聞であったが、最初、『皇城新聞』に拠り、のち『大韓毎日申報』の編集の任に就いた朴殷植³⁴は、その著『朝鮮独立運動の血史』³⁵で、当時の模様を次のように記している。

「学生は校門を閉じて慟哭し、教徒は天をあおいで悲泣し、商人は店を閉めて泣き叫び、儒者は上奏文を投じてみな叫び、元老大臣は抗争をくりかえした。」

そして、いよいよ一九一〇年八月二十九日、日韓合併条約が調印される。朴殷植は『朝鮮独立運動の血史』で、次のように書いている。

「ああ、八月二十九日は、わが国の国恥記念日である。そして国内の朝鮮人民は、日本の兵威に圧迫され、ただ声をのみ、うらみをおさえて併合の形式的発表をみていなければならなかったのである。」「また一般の民

意の動向をいえば、表面的には服従しており、平和で事なかれのようにみえるが、巷のなげき、寢室での涕涙など、なに一つとして祖国を思わないものはない。農民はすきをふるいながら、「いつの日か、あの倭奴どもを草を刈るようにとり除くことができるか」と言っている。木樵は斧をなでながら、「いつの日か、あの倭奴を薪を切るように切り倒せるだろうか」と言っている。洗濯している婦女は、「いつの日にか、倭奴を砧でたたきのめすことができるか」と言っている。雀をとっている子供は、「いつの日にか、倭奴をうちおとせようか」と言っている。祀祭する巫は、「いつの日にか、神は無道な倭奴に天罰をくだすのであろうか」と言っている。これらのことはみな、人民の心に固く結ばれた独立精神が自然に流露したものである。しかし、かの日本は、なおおごりたかぶり、同化を談じているのである。」

ここで看過してならないことは、新聞や雑誌による言論、とりわけ新聞が果たした役割であろう。近代の朝鮮における最初の新聞は、一八八三年に創刊された『韓城旬報』⁽³⁶⁾であるが、これは漢文で書かれた開化派の啓蒙新聞であり、近代的言論の新聞とはいい難い。最初の近代的な言論の新聞は、一八九六年に創刊された『独立新聞』⁽³⁷⁾としなければならないが、これ以降の新聞は、一部の「御用新聞」をのぞき、いずれも反権力と在野精神に満ちあふれ、「統監政治」時代、「日本統治」時代には、つねに抑圧された民衆の抵抗の場として存在したのである。

一九一九年の三・一運動を契機に、朝鮮総督府は「武断政治」を「文化政治」に転換して、ハングル文字による民間新聞の発行を許すが、一九二〇年三月創刊の『朝鮮日報』⁽³⁸⁾、同年四月創刊の『東亜日報』は、一九四〇年八月の強制廃刊に追いこまれるまで、満身傷だらけの抵抗を示すのである。『東亜日報』は創刊わずか五か月で無期停刊処分を受け、三か月以上も復刊を許されず、一九二〇年から一九二三年まで毎月平均一五回も押収され、その後、

一九三〇年、無期停刊処分を受けるまで、毎年四〇回から五〇回押収された。朝鮮日報も、一九二三年までは年二四回程度、一九二四年には四八回、一九二五年には五三回、一九二六年には五五回も押収された。⁽³⁹⁾新聞人がそれほどまでに抵抗を示した背景には「新聞は国内の民衆運動を推進するとともに、愛国運動のために投獄された人々のことや海外での独立運動のニュースなどを詳細に伝える努力を惜しまなかった。全世界における弱小民族の抵抗や社会変革のための革命的な努力を伝えた。新聞人は、すなわち愛国者であるという民衆のイメージが作られた。」「このような言論機関に対する民衆の期待は、今日に至るまでつづいている。そして、この期待が満たされない」と、民衆の目には反逆者のように映るのである。そのために新聞人は権力の弾圧のみではなく、民衆の糾弾にもさらされがちであった」⁽⁴⁰⁾からとみることもできる。

今日、韓国社会において、民衆のマス・メディアとの接触度は、都市・男子・学生・高学歴層で新聞、農村・女子・老人・低学歴層でテレビと二分されているが、⁽⁴¹⁾韓国人全体としての新聞への信頼度、期待度はいぜん高く、影響力も大きい。対日論の形成で新聞と民衆は相関関係をつくりながら、批判的な場を堅持しているというのが、近代的言論の発生らしい、今日までの姿であろう。

㊦ 近因その二

反日論が最も高揚したのは、「解放」直後から、李承晩政権時代にかけてである。「解放」後の学校教育において、「日本統治」時代の皇民化教育の払拭が徹底的に行われたのは、当然といえるが、李承晩政権は「反日」を「反共」とならべて国家建設の柱におき、これがまた絶対多数の国民の支持にもなったのである。

教育の力は大きい。自らが「日本統治」下の「国民学校」を三年生まで経験し、「解放」後は、米軍政下、あるいは

李承晩政権下で小、中、高校、大学と教育を受け、さらにアメリカの大学に留学して、日本の歴史や文化人類学などを学んだ尹正錫・中央大教授（政治学）は、世代によって日本を見る視角が交錯している状況を、次のように述べている。⁴²⁾

「今の五〇代から上は少なくとも日本の教育を受け、日本語を母国語なみのレベルで教えられた世代である。かれらは日本人といっしょに暮らし、少なくとも日本人の教師から教わった経験のある年齢層である。明らかに日本文化の強い影響の下で生き残るために「より日本的な」生活や考えをもつようになったのであり、それは逆に「より反日的」な生活や思考の持ち主である場合もある。もちろん、大部分の農村の人々は大きく意識せずに過ごしたが、おおよそ第二次大戦末期の悪い日本帝国主義政策に対する深い収奪感だけは残っている。四〇代以下の人口層は、かすかに経験した日本文化と観念的に認識した制限的な印象だけが蓄積している世代である。直接的な経験なしに耳で聞いてきただけの日本人・日本観であるため、日本人の悪い点、日本帝国主義から受けた圧迫の印象、戦争と供出、徴用と学徒出征などなど植民地の国民としての苦しみにたいする印象が比較的に大きいといえる。」「日本を直接経験した世代では、日本を容赦し理解することができたため、同じ感情で日本文化を認識することができる。しかし、経験が制限された若い世代は、日本に対する観念的な認識のために、感情に訴える寛容が生まれない。」「現実的に、日本に対する認識には大きな葛藤がある。歴史的感情と文化的蔑視感にともなう日本認識と、西欧文明の東洋的表現に対する羨望と、力による支配という恐怖にともなう認識は、今の私たちを支配している二つの態度であると同時に、一般的な認識傾向であるといえる。」

こうして現実的に起きている日本認識の葛藤は、李承晩政權時代の反日教育が徹底していればいたほど、また今、眼前にある日本のイメージが強く立ちはだかつてくればくるほど、強大なものになり、その間のギャップは埋められないことになる。日本への軽視と反撥は、ブランコのように往復しながら、増幅され、これがひいては古代の關係においては自らが文化の優勢者であり、文化の伝播者でもあったという自彊とも結びついて、近代以降における日本の近代化は欧米の亜流にすぎない劣ったものであるという「日本劣等視」の認識となり、また、最近の技術供与などの面からは、過去の「恩」にむくいない「忘恩の徒」として、「日本糾弾」論にまで発展する。

④ コミュニケーション・ギャップの形成

コミュニケーション・ギャップというのは、コミュニケーションをおこなう当事者同士の意図が十分に伝達されずに、誤解されとか、間違つて受けとられるとかいう現象であり、それは異文化間のコミュニケーションが活発になればなるほど起りがちなものであるが、日韓のコミュニケーション・ギャップを論ずる場合、韓国側からのアプローチだけでなく、日本側からの追求もなさなければならない。日本の対韓意識の底流にある対韓蔑視観の存在を考察しなければ当然、片手落ちになる。しかし、今回は、小論のテーマが「韓国における日本語教育の現状と問題点」であり、紙幅にも制限があるため、韓国側にある問題だけにとどめた。

日本語が学門言語でないというのは、誤解や錯覚にもとづくものであろう。そして、これに感情のギャップや認識のギャップも入っているであろう。遠因と近因がからみあって、韓国における日本語教育は、世界で最も活発な中にも最も難しいものになっている。恐らく、この解決には相当の時間の経過が必要であらう。

ところで、一九八五年五月十七日付『韓国日報』⁽⁴⁾は、ソウル大が国民感情を勘案して、日本研究所の設立を白

紙化したことを、次のように報じた。

「日本の外国人指紋押捺制度が再び問題となつてゐるなかで、ソウル大は十六日、さる八一年から論議してき
た日本研究所設立問題を白紙化した。ソウル大の李賢宰総長は十六日「日本学の研究の必要性は認めるが、別
途に研究所を設置、運営することについては時期早尚だと判断され、このように決定した」と述べ、「日本に關
連のある政治・経済などの研究はこれまで通り、学内の社会科学研究所・経済研究所などを通してつづけてい
く方針である」と明らかにした。ソウル大の日本研究所は、日本についての体系的な研究が不足しているとい
う世論に押され、去る八一年、社会学部の教授十人を中心に設置準備委員会が構成され、数回にわたる会合の
すえ、大学側に設立を建議し、権彙赫前総長が八二年末、「日本研究所」（仮称）設置すると発表していた。そ
の後、研究所設置については、八三年十二月二十九日に学部長會議を通過するなど必要な手続きを終えたが、
設置・運営資金が日本から出されるという噂が流れたうえに、教科書歪曲問題などで日本に対する国民感情が
悪化していること、また姉妹大学である東京大学に韓国研究所がないなどの理由から、国立のソウル大に日本
研究所を設置するのは不合理であるという強い反撥にあい、保留されていたものである。」

（二）具体的な問題

① 学習環境の問題

反日が愛国にさえつながつてゐる社会一般の觀念から、日本語への反感が強く、日本語を学ぶのは恥であるとい
う考え方が学生たちの間にある。このような学習環境は決して好ましい状態といえないが、筆者が韓国内で会つ
た日本語学習の専攻学生たちからも、この種の「周囲の人間に、なぜ、日本語を学んでいるのかと非難される」と

か「教科書問題などで日韓関係の悪化が強まった時に、特に肩身が狭い」という声は、しばしば聞かれた。高校ではソウルなどの大都市において、日本語選択をためらうところが多い。

㊦ 学習の動機・目的の問題

日本語は、韓国語と語順や助詞の使い方、音声などが似ており、また日韓とも漢字文化圏であるため、学習するのに易しいと判断して、学生たちは入ってくるが、実際には文法的にも、相当に差があり、また漢字に音読み、訓読みの区別があつて大変に難しいと、途中で投げだしてくる場合も多い。さらに「就職に都合がいいから」と入ってきたのに、就職が思うようにいかないために悩む例もある。高校では大学入試本位の選択であり、読解が中心になっている。

㊧ 教材の問題

大学においては全般的に体系的なテキストに乏しい。中級・上級に進むにつれ、何を教材にするかで、どの大学も悩んでいる。日本の歴史、文化、伝統、日本人の価値観、意識構造に至るまで、手ぎわよくまとめられた日本事情のテキストとなると、ほとんどないというのが現状である。また補助教材としての掛図などの諸資料、視聴覚教材の充実も、望まれる。「生きた日本を紹介する教材づくりがほしい」と、現場の関係者からは聞かれた。

㊨ 教員の問題

大学、高校ともに専任教員の不足が目立っている。このため大学の専任教員でも週十八時間から二十四時間の担当（世宗大など）となり、高校では二十四時間が普通となっている。また教員の層が植民地時代に日本語教育を受けた五〇代以上と、いわゆる「解放」後のハングル時代に育った四〇代以下に二分されており、ハングル世代の

教員には「学問的な研究は深めている」という自信がある一方、「アクセント、濁音の指導などで会話力に劣る」という悩みがある。大学の教養課程、高校では大人数のため口頭練習の機会が、ほとんどない。

おわりに

日韓の過去における不幸な歴史にもとづいて、日本人も韓国人も、それぞれ相手国に対して、今も容易には抜き難い偏見を持っているが、これからの相互理解の増進には、相互間の社会的・心理的な距離を縮めることが必要である。この場合、直接接触がいかに役立つものであるかは、国際交流基金が、毎年、外国から優秀な日本語学習の学生を六〇―七〇人ていど日本に招待している「海外日本語講座成績優秀者研修会」の出席者から、帰国後、送られてくる感想文の内容をみてわかる。韓国の大学生からは、次のような文が寄せられている。(原文のまま)

「私、日本へ行く前には日本に対していくらか偏見を持っていたんです。幼い時から自然的に日本はよくない国だという心が形成されたんです。我が国と日本との歴史的関係の影きようだったかもしれません。とにかく私は日本を先進国として受け入れようとしませんでした。その他日本人の意識と生活習慣に至るまで私、日本語を勉強していながらも反抗的な目で見ました。ところで日本へ行つて生活する内に私にはもう色々考え方の変化が起りました。日本に対してだけでなく人間について、人生について多くの変化や感動、確認などがありました。」私の今までの生活というのは井底之蛙のそれだったんだと思いました。もっと広い心と高い考えを持たなくては……と思いました。」そして人間というのは皆同じだと言うのも再確認しました。(筆者註、世界から集まった若者たちと一緒に生活したことなども含めての感想)ちがいは環境で育てられて習慣の差はあると

言っても同じ感情を持つて似ている考え方をする彼らを見ながら世界はこのようにして親しくなるのが出来る
と思いました。」

相互交流こそは、社会的・心理的距離を縮めさせ、それがやがては相手国に対する知識・関心を増大させ、さらに態度・イメージまでも良好にさせる大きなきっかけになるものといえよう。この小論を終えるに当って、とりわけ若者たちの相互交流が活発になるのを祈ってやまない。また本学の裴徳煥客員教授、誠信女子大(在ソウル)の森田芳夫教授ほか内外の多数の研究者にご指導ご協力をいただいたことを付記して、感謝の言葉としたい。

(一九八五・十二・十九)

註

- (1) 李弘植博士編『完壁国史大辞典』ソウル百萬社、一一九ページ
- (2) 金義煥著『朝鮮近代対日関係史研究』ソウル景仁文化社、一七ページ
- (3) 前掲書、五二二―五二三ページ
- (4) 前掲書、五二三ページ
- (5) 中村栄孝著『日鮮関係史の研究』下、吉川弘文館、三九八―四二二ページ
- (6) 朝鮮史編修会編『朝鮮史』第六編第一卷、東京大学出版会、八九ページ

(7) 李光麟著、改訂・増補版『韓国開化史研究』ソウル一潮閣、一三五―一五八ページ

(8) 前掲書、一四三ページ

(9) 姜在彦著『朝鮮の開化思想』岩波書店、三三〇ページ

(10) 李光麟著、前掲書、一五六―一五七ページ

(11) 阿部宗光・阿部洋編『韓国と台湾の教育開発』第一部・韓国の教育開発・渡部学、アジア経済研究所、四七ページ

ジ

(12) 森田芳夫『韓国における日本語教育の歴史』日本語教育第四十八号、社団法人日本語教育学会、三ページ

(13) 姜在彦著、前掲書、三五九―三六一ページ

(14) 三・一運動とは、一九一九年三月一日を機して行われた朝鮮独立運動であり、ソウルのバグダ公園に集まった学生を中心とする一群の中から突如、独立宣言文が読まれ、このあと示威運動に移ったが、朴殷植『朝鮮運動の血史』によると、ソウルおよび地方で、二か月以上にわたり、この運動に参加したものは二百万、投獄されたものは四万六千名、死者七五〇九名に達した。

(15) 萩原彦三『日本統治下の朝鮮における朝鮮語教育』友邦シリーズ第三号、財団法人友邦協会、一五―一六ページ

(16) 萩原彦三、前掲書、一九―二〇ページ

(17) 『朝鮮総督府施政年報』によると、一九四二年末で「日本語を稍触し得るもの二、三三三、八四三人、普通会話に差支えなきもの二、七三五、三七一人、人口一、〇〇〇人に対する割合一九九・四となっている。

(18) 四・一九革命とは、一九六〇年四月十九日、それまで十二年間にわたる李承晩政權の独裁政治に対する民衆の

鬱積が爆発して、ついにそれを打倒した学生革命をいう。

(19) 稲葉継雄「韓国における戦中・戦後教育の史的考察(一九三七)——言語教育を中心として」多賀秋五郎編著『現代アジア教育史研究』多賀出版、二七六ページ

(20) 前掲書、二七七ページ

(21) 前掲書、二七七ページ

(22) 李栄九「韓国の日本研究——過去・現状・展望——」国際交流通巻三十一号(昭和五十七年四月八日発行)国際交流基金、三五ページ

(23) 『東亜日報』は、一九二〇年四月、朝鮮総督府の文化政治への転換にもとづきハングルの新聞として創刊、「日本統治」時代の紙面ではハングルの普及運動を推進したり、ベルリン・オリンピックのマラソンで孫基禎選手が優勝すると、孫選手が着ているランニングの日の丸の写真を黒く塗って掲載するなど、数々の抵抗を行った。一九四〇年八月の強制廃刊までの紙数六八一九、「解放」直後に復刊、今日に至っている。現在は夕刊紙で、最有力紙のひとつ。

(24) 稲葉継雄、前掲書、二七七ページ

(25) 前掲書、二八八ページ

(26) 権威ある言語(プレステージ・ランゲージ)とは、その言語の使用人口が多く、その言語で書かれたものが多岐にわたって水準が高く、しかも専門研究のうえで使用にたえ、さらに習いたいという欲求が強い言語のことである。日本語はすでに世界の媒介語としても、大言語となり、鈴木孝夫氏の著書などによると、英語に比肩する力を備えて

おり、言語使用の人口比では世界で六番目となっている。

(27) 姜在彦著、前掲書、三五ページ

(28) 前掲書、七九ページ

(29) 海游録とは、一九一九年(享保四年)に徳川吉宗の將軍職襲位を賀して、朝鮮から洪致中を正使とする朝鮮通信使の一行四七五名が訪日した際、製述官として随行した申維翰の日本紀行文で、四月にソウル(漢城)を出発して十月に江戸に至り、翌年一月にソウルに帰って復命するまでの九か月にわたる詳細な日記と、それを基礎にして整理した日本観察としての「日本聞見雜録」から成る。

(30) 申維翰・姜在彦訳注『海游録』(東洋文庫二五二)、平凡社、二九七―二九九ページ

(31) 『皇城新聞』は、一八九八年九月、日本帝国主義に反対した張志洙、朴殷植、羅寿洙、南宮模、柳謹らが愛国運動の第一線に立って創刊した新聞、一九一〇年の日韓併合によって消滅した。

(32) 池明観著『韓国文化史』、高麗書林、三四二―三四三ページ

(33) 『大韓毎日申報』は、一九〇五年、ロンドン・デイリー・ニュース紙特派員だったイギリス人ベッセル(裴説、Bethell)が国文(ハングル)と英文で発行した新聞で、抗日言論活動の中心的な役割りを演じたが、一九一〇年の日韓併合で消滅した。

(34) 朴殷植は、一八五九年、黄海道黄州郡の生まれといわれるが、はっきりしない。甲午農民戦争のころから頭角をあらわし、一九一五年には大同輔国団を結成し、満州からシベリアの同胞を独立運動に結集し、一九二五年には上海の臨時政府の第三代大統領に就任、同年十一月十日、六十七歳で客死するまで、熾烈な抗日闘争を展開し

た戦闘的かつ行動的な知識人。

(35) 朴殷植著、姜徳相訳注『朝鮮独立運動の血史』1(東洋文庫二二四)、平凡社、三三三ページ

(36) 『韓城旬報』は、一八八三年十月、開化運動派の反封建的な啓蒙新聞として、福澤諭吉門下の井上角五郎の後援で創刊されたもので、一八八六年一月からは『漢城周報』となる。純漢文で書かれた。

(37) 『独立新聞』は、一八九六年四月、アメリカでの亡命生活から帰国した徐載弼が国文(ハングル)と英文で創刊した朝鮮近代での最初の日刊新聞。民衆の側に立つて改革と革新を叫び、権力層の腐敗を攻撃する抵抗の新聞として、一八九八年まで二年半つづいた。

(38) 『朝鮮日報』は、一九二〇年三月、朝鮮総督府の文化政治にもとづきハングルの新聞として創刊、一九四〇年の強制廃刊まで六九二三号、発行した。「解放」後、直ちに復刊、いまは朝刊紙として最有力紙のひとつとなっている。

(39) 池明観著、前掲書、三八九ページ

(40) 前掲書、三八九ページ

(41) 月刊『新聞と放送』一九八五年四月号「特集・新聞読者と製作者」、韓国言論研究院、四八ページ

(42) 月刊『アジア公論』一九八四年六月号、「特集・韓日関係20年、その表と裏」、尹正錫「日本を見る交錯した視角」、韓国国際文化協会、五八〜五九ページ

(43) 辻村明・金圭煥・生田正輝編『日本と韓国の文化摩擦——日韓コミュニケーション・ギャップの研究』辻村明「序章・理論と方法」、出光書店、六ページ

(44) 『韓国日報』は、一九五四年六月、当時、斜陽にあった『太陽新聞』を、前朝鮮日報社長張基栄が引受けて創刊し

たもので、新聞製作の機械化もすすみ、有力紙のひとつとなっている。朝刊紙。

(45) 辻村明・金圭煥・生田正輝編、前掲書、「第一部 日韓相互のイメージ」、一三―一〇五ページ